書　評

染谷　孝　著
「人に話したくなる土壌微生物の世界」
出版社：築地書館，2020 年

本のカバーの背景は土を想像させる。よく見ると，黒色の下地に土色にした微生物のスケッチが沢山描かれている。いろいろな形の微生物たちがいる。裏カバーには，スケッチの微生物たちの名称が記されており，改めて表カバーの中の微生物たちを探索したくなる。8 章からなる構成は，どれも独立していてどこからでも読める。微生物の初学者であれば，第 1 章（未知の世界がいま明らかに―人と微生物の関わり）に続けて第 2 章（土と微生物）を読めば，自ずと，第 3 章（善玉菌を活用する―微生物資材）と第 4 章（環境を浄化する微生物）に導かれる。この本の推しは第 6 章（堆肥と微生物）だろう。農業での土づくりに欠かせない堆肥が微生物の働きによってできることが丁寧に書かれている。科学的データを示しながら話を進めた先に，「段ボールコンポスト―家庭で作る生ゴミ堆肥」のような実用的な解説や生ゴミ堆肥をめぐる地域コミュニティの話にまで展開する。堆肥づくりを通して微生物をうまく扱うことは新たな地域づくりにまでつながるのだ。もう一つの推しは，第 7 章（洞窟の微生物）である。洞窟は著者の研究対象であり，これまで微生物学者があまり研究してこなかった環境なので，この章で整理した内容は新たな分野の宣言と言える。微生物と言えば，病原菌も忘れてはならない。本書では第 5 章（土の中の病原菌）で，食中毒菌を中心に解説されている。最終章（土壌から宇宙へ）では，地球内部の微生物の研究から，空を見上げて地球外生命体についても考察しており，土壌から始まる微生物研究の奥深さが伝わってくる。読み終えて，口絵の顕微鏡写真の微生物たちをもう一度眺めてみるといい。小さな生き物のとても大きな世界が想像できるはずだ。

太田寛行（日本土壌微生物学会・会長）